

## 巻頭言

## 総合情報基盤センターへの期待

富山大学副学長 塩澤 和章

平成15年4月に総合情報処理センターが改組され、富山大学総合情報基盤センターが発足して1カ年が経過します。このセンターも基を辿れば、「計算センター」から始まり「計算機センター」、「情報処理センター」、「総合情報処理センター」と名称を変え、コンピュータの発達、情報処理技術や情報通信技術の進展と共にセンターの役割も大きく変わってきました。従来の科学技術用および事務用の計算処理に限定されていたセンターの業務はその姿を大きく変えて、現在では「情報」をキーワードとした多様な業務となってきました。この「計算」から「情報」への流れに呼応して、総合情報基盤センターは格段に拡充されて、情報通信技術、情報メディア教育および学術情報サービスの3つの研究開発部門が設置されました。センター所属のスタッフも学内教職員の理解と協力のもとに、専任教員6名と技官3名が配置されています。このように充実したセンターの機能を十分に活かして、高度情報化社会に対応した教育・研究の推進と大学の機能の活性化に努めていただきたいと願うものです。

昭和40年3月に設置された計算センターから約40年の時を刻み、計算処理速度の高速化と広範な情報の迅速、的確かつ緻密な処理が可能となりました。一方で、LANの敷設によるネットワークシステムの充実、マルチメディア化の推進、端末室の設置や情報機器等の充実による情報処理教育の支援など情報環境整備が着実に実現してきました。今では人間の生活に必要な空気や水と同じく、コンピュータは日常的に欠かせない教育・研究・事務用機器の一つとなっており、今後も利便性と安全性・信頼性を重視した情報基盤の整備が必要となります。

さて、大学の有する機能は「知の創造(研究)」、「知の継承(教育)」および「知の社会貢献」であり、とりわけ最近では大学の社会・地域貢献が強くと求められてきています。これは大学の有する様々な知的財産・資源を広く社会に向けて公開し、社会の発展に寄与する必要があることが従来にも増して要請されているものです。大学人による知の創造の成果やその活動によって蓄えられた様々な情報を迅速かつ

的確に国民に対して伝達することは今後の大学に求められる大きな役割といえます。とりわけ、国民の血税によって支えられている国立大学(国立大学法人)には情報の公開は避けて通ることはできないと考えます。この情報公開には総合情報基盤センターの果たす役割は多大のものであり、本学における知的財産に関するデータベース構築と公開手法の開発と推進に一層の取り組みをお願いしたいと思います。例えば、附属図書館との連携による電子図書館機能の充実によるバーチャル・ライブラリー構想、大学の所蔵する各種の歴史的資産や最近の研究成果を解り易く解説するバーチャル・ミュージアム構想などが思い付きます。このことは市民への情報公開の促進に対応し、市民の知的好奇心の涵養と生涯学習やリフレッシュ教育に直接役立つものと考えます。

平成16年4月から本学を含む国立大学は国立大学法人に移行いたします。このことは大学の歴史を大幅に変革する一大エポックです。大学の自主性と自律性のある運営が求められ、諸活動は自己点検・評価に基づいて第三者評価を受けることとなります。この評価の基礎となるデータの収集と蓄積、並びに的確な分析が大学に求められます。教職員の個人データは勿論、大学の諸活動に関するデータの収集、データベースの構築が早急に必要です。有効なデータベース構築には全学の協力と英知を結集して臨むことは当然ですが、総合情報基盤センターの協力は欠かすことができません。

「知の創造」活動における学術情報の迅速かつ的確な収集とその成果の発信の為の情報基盤の整備、「知の継承」における時代に対応したマルチメディア教育やeラーニングなどの教育環境や学習支援システムの整備による人材育成の推進など、総合情報基盤センターに期待する役割は枚挙に暇がありません。大学冬の時代と言われる中において、夢と希望もてる大学の構築に全学教職員並びに学生の総力を挙げて取組みたいと念願し、その核の一つとして総合情報基盤センターのますますの貢献を期待したいと存じます。